HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	邦訳『昆虫記』をめぐって
Author(s)	濱田, 康行
Citation	学士会会報, 869, 60-64
Issue Date	2008-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33031
Rights	『学士会会報』869号（2008年3月号）より
Type	journal article
File Information	hamada.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

邦訳『昆虫記』をめぐって

北海道大学経済学部
濱田　康行

〈ファーブル展〉

昨年、北大の博物館で「ファーブル展」という催し物があった。普段、理系の建物に出入りすることのない私だが、東京から来た友人が観たいというので一緒に行った。そこで教養の浅い私はとても驚いたのである。

展示室のガラスケースに『昆虫記』の最初の日本語訳が置かれていた。これは北大農学部の蔵書であったが、何気なくそれを見ているうちに“大杉栄”という訳者の名前が目に入った。

大杉栄といえば、無政府主義者という言葉がまず頭に浮かぶ。逮捕され憲兵に殺されたという当時の第一級の“危険思想”の持ち主である。アナーキストの大杉がなぜ彼の人生・思想の対極にありそうな“美しい澄み切った世界”である『昆虫記』の翻訳を手掛けたのだろう。思想形成の頭休めに読んだというなら話はわかる。一方の極にのめり込むと、その対極が恋しくなるというのは私のような凡人にもままあることだ。しかし、私の目の前に示されたのは、少し違う。翻訳というのは経験した人なら分かるが大変な作業だ。語学力はもちろんだが忍耐と時間がなければ完成できない。大杉の人生はたった 38 年間だ。この短い間に彼はとてつもない波乱に満ちた日々を送った。そして著作も多い。現代思潮社から彼の全集が出版されているが、それはなんと 14 巻もある。その多忙な彼が、仕事柄からいけば関係のない『昆虫記』の翻訳をなぜすることになったのか。

〈大杉栄〉

大杉はいくつかの点で他の社会主義者・思想家とかなり異なっている。その第一点は自然科学への関心である。自分の社会に関する思想を創り上げるに際し、生物学と文化人類学を両輪としたいと考えていた。

「まず社会を組織する人間の根本的性質を知るために生物学の大体に通じたい」

大杉の生物学への関心は、丘浅次郎『進化論講話』によって開かれたという（『大杉栄』中央公論社、多田道太郎氏の解説）。

当時、ダーウィンの進化論は日本の知識人にも知られていた。だから思想家が皆、生物学音痴だったのではないが、進化論は社会ダーウィニズムとして、つまり相当に変形されて日本に輸入されていた。大杉も「僕等の思想界では、例の奇妙な生存競争説以外にはほとんど少しも行われていない」と述べている。

大杉の第二の特異点はその語学力である。日本だけの現象だが、社会運動家は語学音痴が多い。大杉は違っていた。現在の東京外国語大学の仏文科を卒業している。そして、短期間で語学をマスターする才能に恵まれていた。

「在監中にはぜひエスペラント語を大成し、ドイツ語を小成したいと思っている」（前出、中央公論社版『大杉栄』）。そして目標は 30 歳までに 10 ヵ国語をマスターすることだと豪

語している。

言うまでもなく『昆虫記』の原書はフランス語である。ファーブルが観察した虫の種類別に編集された英訳本が先に日本では紹介されている。大杉も最初はこれから邦訳するつもりだったらしい。

大杉の特異の第三点目。これが最も興味深いのだが後にとっておこう。

大杉はかねてより生物学に興味を持っており『種の起源』の翻訳もしているが、なぜファーブルにまで関心がおよんだのか。彼の背中を押した人物がいる。これも、なかなか意外、それは賀川豊彦である。

〈賀川豊彦〉

よく知られているように賀川は日本の生協運動の父であり、現在のコープこうべ（1920年 4 月神戸購買組合）の創始者である。しかし彼の人生はそれだけではない。日本の思想史上、これほど多彩な人物もいない。社会主義に接近し労働運動の指導者になったり、かつまた農村に入って農民の組織づくりに励んだりの実践活動の他に実に多くの書物を書く。その中には『死線を越えて』のような当時のベストセラーもある。しかし、彼を内から支え続けた精神の柱は非暴力主義のキリスト者としての賀川であった。

さて、賀川の活動拠点は関西であり、大杉は東京人だ。生い立ちも思想も違う二人はどこで接点を持ったのか。接点はあったはずなのだ。というのは、ファーブルを日本に紹介したのは賀川であり、大杉にファーブルの英訳本を貸しているのも賀川だからだ。

社会運動家でキリスト者の賀川がなぜファーブルに関心を持ったか。その経緯は大杉の場合と少し異なる。少しといったのは、賀川の場合も起点は『進化論』だからである。既に述べたように、ダーウィンの学説は生物の世界から出発して社会・国家に及び、いわゆる社会ダーウィニズムとなって広く世界に流布されていた。アメリカでは J.D.ロックフェラーや鉄道王のジェーム・J・ヒルなどに影響を与えた。それは本家のダーウィンが意図したものというより、ハーバート・スペンサーを経て形成され、それにマルサスの『人口論』の再評価という特殊な添加物が加わった単純な主張にすぎなかった。しかし単純なだけに優生学説を後押し、様々な人種差別、果てはナチスのユダヤ政策にまで採用されてしまった。

日本でも明治以来、富国強兵は国のスローガンであり、その背後には弱い国は強い国に食われてしまうという単純な弱肉強食論があった。賀川はこうした時代の風潮に批判的であった。「富国強兵をやかましく言う社会組織に飽きが来た」（ロバート・シルジェン、『賀川豊彦～愛と社会主義を追い求めた生涯』新教出版社）。常に社会の弱者に眼を向けていた賀川にとって自然淘汰説は容認できなかったに違いない。そこで、彼は生物界に反ダーウィンを探しにいく。そしてファーブルを発見する。ファーブルは昆虫の世界を観察して本能の世界を発見する。が、それはダーウィンも未知の分野として認めていた。ファーブルは本能の世界のさらに向こうに、それさえも統御する至上の創造主をみる。

ダーウィンは、進化論を発表した後も自らが無神論者と思われることを好まなかったと

いう（ジャネット・ブラウン、長谷川真理子訳ダーウィンの『種の起源』ポプラ社)。しかし、ダーウィンの学説についていくと神から離れてしまう心配がある。

〈ダーウィンからファーブルへ〉

一貫したキリスト者の賀川はファーブルに出会ってほっとしたに違いない。だから「実に我がファブレ」などというセリフも出てくる。賀川は「ファブレ（賀川の訳）の生存競争の研究」と題する論文で、ダーウィンを批判し、ファブレを対抗軸として持ち上げている。しかし、これは贔屓の引き倒しのようでもある。確かにファーブルは 1914 年の新版の序文で進化論を批判したようにも受け取れる文章を残している。しかしファーブルがダーウィンに敵意を抱いていたとは思えない。ファーブルは『昆虫記』の第一巻をダーウィンに謹呈し、ダーウィンはそれに礼状を書いている。イギリスのケント州から南仏のプロバンスに送られたその手紙は It has gratified me much that you should have thought of sending me a copy of…で始まっている。この手紙のコピーが今回の北大展示で公開された。ダーウィンは前文に続けて、「君の調査を真に評価できるのはヨーロッパには誰もいないから、私こそ本の贈呈を受けるにふさわしい人間だ」とやや不遜とも、ファーブルを下にみたとも思われる言葉遣いをしている。しかし 1880 年当時、ダーウィンは既に大学者として名声を確立しておりケント州で悠々の生活をしていたのに比べ、ファーブルは小学校の先生を続けながら 40 年の歳月をかけようやく『昆虫記』の第一巻を出したところ（1879 年）であった。当時の両者の格を考えれば仕方がない。その後ダーウィンはファーブルのことを大いに評価し「比類なき観察者」として各方面に紹介している。

〈出会い〉

賀川と大杉が会ったのは大阪である。この時が初めてかどうかわからないが、二人は中之島公会堂で行われた社会主義者同盟の集会（1920 年 12 月）で賀川は弁士、大杉は主催者として名を連ねている。当時の日本の社会主義者達はいわゆるボルシェビキ派とアナーキスト派の間で路線をめぐる論争を続けていた。前者はロシア革命の成功を受けて、強力な共産党による労働運動の主導を主張したが、大杉に代表される後者は、自我の確立によってのみ社会主義者として存在できるとして、上からの指導に疑問を呈していた。ところが、当局の弾圧が激しくなり、賀川のようなどちらにも与しない人々が接着剤となって一時期、両派の間に同盟が成立したのである。この頃、賀川は彼の人生の中で最も労働運動に接近していた。しかし、“万国の労働者団結せよ”などというマルクスの言葉を使いながらも、非暴力のキリスト者の立場を守った。

賀川は「大杉氏」と、大杉は「賀川君」と、それぞれのことを呼んでいるが実際に二人の関係がどの程度のものであったかは明らかでない。ともかく二人は対照的である。大杉は、よく言えば豪放磊落、無手勝流の一匹狼であった。他方、賀川は温厚な紳士であり、上品な教養あるキリスト者であり、いつも多勢の支持者に囲まれていた。こうした違いを象徴するのは二人の私生活である。賀川は妻を愛し家庭を大切にする人だったが、大杉は波乱万丈、一時は三人の女性との関係を続けるなど、まさにロマンの人であった。これが

先程、保留した大杉の第三の特異点である。日本の思想家、特に社会主義者と呼ばれる人々は概して禁欲的である。ところが大杉は違ったようだ。彼は多感・多様であり文学的人物であった。ファーブルが発見した本能に魅せられたのは彼のこうした傾向によるものかもしれない。

共通点もあった。抜群の行動力、優れた文筆力、そして二人は外国語の達人であった。賀川は英語。若くして渡米しプリンストン神学校を卒業している。1921 年にバートランド・ラッセルが来日した際には講演の通訳を勤め、晩年は、アメリカ各地で大聴衆を前に講演・説教を行った。他方、大杉はフランス語を中核にした語学達者だった。二人には批判者が多かった。これも共通点だろう。大杉は強烈な個性、そして私生活の状況から次第に孤立する。賀川は、多面的であったために、一面的な人々（例えば社会主義者、アナーキスト）から不徹底だと批判される。

想像するに、大杉ほどの自信家でも賀川には多少のコンプレックスを感じていたのではあるまいか。賀川に対抗しうる何かを探していたようだ。そこで『昆虫記』が登場する。賀川が大杉に貸したのは『昆虫の社会生活』というマイアルによる英語版である。フランス語の得意でなかった賀川はファブレなどという訳をつけ、これを大杉は嘲笑っている。未決囚で一度出獄した大杉は東京の丸善でファーブルの原書を購入し、それをもって再び監獄に入る（後に、『昆虫記』そのものの原書も差し入れられた）。大杉は、この仕事は自分にしかできないと思っていたに違いない。『昆虫記』の邦訳は 1922 年の 8 月に刊行された。その一年後、大杉は 38 歳の短い生涯を終えた。邦訳『昆虫記』の続刊は椎名其二らに引き継がれる。

西洋の巨星二つと、日本の一等星が二つ、都合 4 つの星で型取るフレームの中に邦訳『昆虫記』の第一巻は生まれた。まるで冬の夜空のオリオン座のように、それは時空を超えて輝いている。